Urban Design Lab. Magazine

東京大学都市デザイン（西村・窪田）研究室
工学部都市工学科／工学系研究科都市工学専攻
http://ud.t.u-tokyo.ac.jp/index-j.html

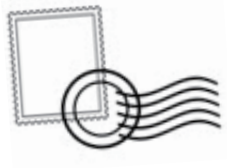
編集長　：福士 薫
編集委員：柏原 葉那　越村 高至　萩原 拓也
瀬川 明日奈　高梨 遼太朗　道喜 開視　原 由希子

都市デザイン研マガジン vol.203　2013.9.25

初代編集長、思い出のお便り
The Memory of the First Chief Editor

ーマガジン 200 号を記念してー
– for the 200th Memorial Number –

2005 年 4 月 15 日、都市デザイン研究室に研究生として所属しておられた初代編集長の酒井憲一さんによって創刊された研究室マガジン。その 200 号突破を記念して、酒井さんから研究生時代の思い出話をご寄稿していただきました。



「廊下とんび研究生」　酒井憲一　2013.8.22

▲西村先生還暦のお祝いにて

都市デザイン研究室の廊下で、ドアノブにぶらさがったちらし類をとり、そっと中に入って助手や女性技官や女優の秘書にあいさつ、院生たちには目線でエールを送り、そそくさと壁に貼られたポスターや掲示類を読み、ちらし類を手にして退出、廊下でコンペ入賞作品などを見てから、西村教授と北沢助教授の講義を皆出席し、他学部のアメニティを冠した講義を探して聴講し、研究室会議、創刊した都市デザイン研マガジンの月 2 回の編集会議、ジュリー、バーベキュー、夜の懇親会など出られるものは長崎の出島のごとくむさぼりつき、マガジンの情報収集を兼ねて皆出席した。まちづくりプロジェクトも参加した。

物理的居場所としては、研究室人員の膨張限界のため押し出され、廊下とんびで研究室の活気に接することも勉強になった。一番の行動指針は西村教授の忘年会の大獅子吼だった。女優秘書から所属する劇団 40 カラットの観劇にいざなわれた。皆出席主義の私は、理系研究室と女優というミスマッチに惹かれたこともあり、後年までその観劇を皆出席した。

薄暗い研究室前の廊下をゆきつ戻りつ、ドアを開け放った北沢助教授と目が合うごとに「よおっ」という励ましのエナージを送られ、恐縮して身をすくめた。研究室の机配給は酒井の席をしつらえるよう西村教授から新人助手に声がかかったが、無理だった。長机に持ち物と氏名を書いて置いても、誰かがそれを押しのけている。助手に「やはり無理？」と尋ねると「すみません」。物不足の終戦時の争奪戦を想起した。そこで新聞記者時代の「廊下とんび」取材を思い出し、耳をそばだたせての廊下徘徊を工夫した。ときに西村教授と会うことがあった。挙動を怪しまれての博多弁が聞こえた気がした。

「なんばしよると？」
「ええ、げんきです」ともじもじ。
「どうしたと？」
「研究室へきました」なおもじもじ。
「なんしとーと？」

研究室内に物理的な居場所のないことは黙っていた。そのころ、北杜夫の『どくとるマンボウ医局記』（慶応大学神経科）を読み、「白衣のはみだし」に共感して高揚した。

「フレッシュマンは医局に出勤し、まず宿直室にかけられている白衣を着る。だが、なぜか医局に着くのはビリのほうになってしまう。すると、新調したはずの私の白衣はとうになく、誰の物とも知れぬ、薬品でしみがつき、ほころびかけた白衣しか残っていない」

しかし、着なければ医者に扱われない。はみだしの私はビリ意識を楽しんだのだった。

北沢教授（昇進）は追い出しコンパで私に学位論文をと勧められたが、夭折された。中島助手は私が前から研究していた「都市美協会と橡内吉胤」の専門家だった偶然もあり薫陶を受け、研究室会議で発表の場を与えられた。親しいオギュスタン・ベルク博士の特別講義を西村教授にお願いして実現できた。博士と研究室との本郷ツアーも忘れられない。

「廊下」もあったが、高齢者受け入れを決断された西村教授の懐への感謝の日々だった。

プロジェクト報告

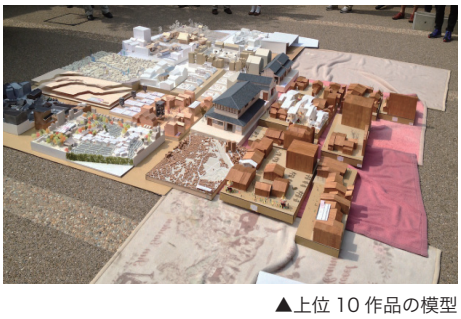
佐原 Sawara-project プロジェクト

ー歴史的空間再編コンペに挑戦！ー

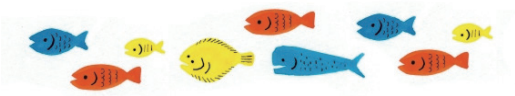
text_koshimura

▲ファイナル会場の金沢 21 世紀美術館

9 月 22 日 (日)、金沢 21 世紀美術館などで開催された歴史的空間再編コンペ公開審査に M2 柏原、越村が参加しました。午前の審査員巡回による 1 次審査を通過し、午後のファイナルプレゼンで 7 位という結果になりました。佐原 PJ チームとして今回提案した「まちなか　こどもだむ」は、まちなか外縁部の余剰空間を活かし、佐原小学校児童の下校を一時的に受け止めるというものです。審査では提案のストーリーやスケッチの伝える楽しそうな雰囲気、そして「こどもだむ」というタイトルが評価されましたが、建築の提案の密度、余剰空間の管理や子どもを見守るプログラムの厚みに課題が残りました。佐原 PJ としてどのような空間再編を目指すのかを、これまで取り組んできた観光客の回遊、住民の生活圏調査と組み合わせながら、まとめていきたいと思います。


▲上位 10 作品の模型

ハノイ水利用デザインプロジェクト
The Report from Hanoi Water Use Project



ハノイ都市圏での将来の気候変動に適応可能な新たな都市圏水利用システムや、水資源ビジョンの提示を目的に行われている、ハノイ水利用デザインプロジェクト。8 月 23 日 (金) ～ 26 日 (月) にかけて、ヴィン・クゥイン集落とタン・チー集落を対象とした調査に窪田先生が参加されました。

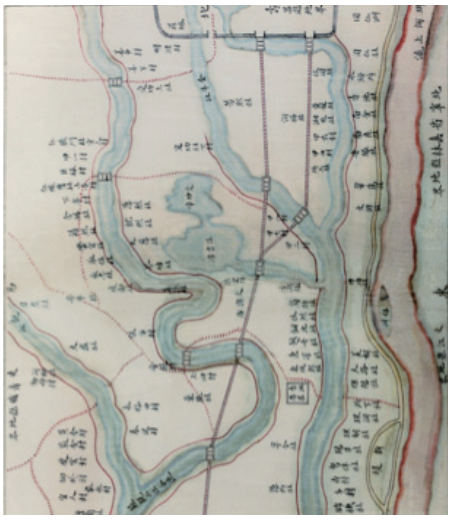
窪田 亜矢 准教授

ハノイの周縁には、研究室 OG チーさん Le Quynh Chi が博士論文で明らかにしたように農業を基礎とした自立的な集落がいくつもあり、土地利用、中心的な施設 (寺、神社、公民館、市場など)、街路、共有水面 (池／井戸／水路など) によって形成される伝統的な空間構造は今も息づいています。どこの集落に行っても人と人の濃い関係を感じられます。

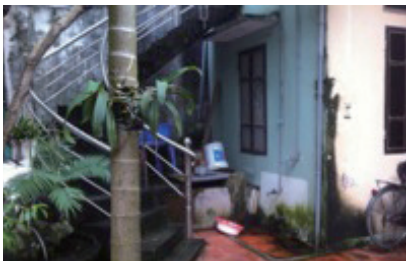
一方で、急激な都市化の過程にあり、物理的にも社会的にも環境が変化していますが、全てが良い方向だけでもないようです。特に水環境から捉えると、元来、平坦な地形で池が多かったので排水が難しいうえに、上水道の勾配も確保しにくく蛇口の水は透明ではなかったりします。地下水は一部ヒ素が疑われ、頼ることはできません。開発圧力は高まっていて、様々な水面の埋立が進んでいます。

チーさんの他、荒巻先生 (東洋大学) や大瀧先生 (お茶の水女子大学) と一緒に、集落の水環境について、足掛け五年にわたる調査を進めてきました (研究チームの全体は古米先生や滝沢先生はじめ環境系の先生方の多くが入られていて、計画系は私一人です)。チーさんのところの学生さんは皆、非常に熱心で真面目で少しシャイで、一緒に集落を回るのは大変楽しみです (特にランチの時間！)。

最近ようやくたどりついたプロジェクトの方向性は「伝統的な雨水利用の維持促進」と「公共水面の再生」の二点です。それらによって、選択肢を増やすことによる清浄な飲料水の確保や日常的な雨水のあふれ出しの防止に貢献できると考えています。ひいては集落の基本的な構造を豊かにすることにもつながるでしょう。8 月 24 日 (土)、対象地としているタンチー集落にて、コミュニティリーダーを含む住民の方々に集まっていただき、この方向性を発表してきました。想像以上に良い反応と活発な議論になり、今後は提案としてまとめる予定です。



タンチー (青池＝ Thanh Tri) 集落の古地図は漢字表記です (ベトナムでは漢字教育は辞めてしまいました)。紅河沿いの「萬福洲」や沢山の「社」の字が意味を伝えてくれます。



お世話になっているコミュニティリーダー宅の雨水タンクです。雨水は美味しいのに、若い世代は時代遅れだと感じているそうです。この話が、今回の方針に大きく影響しました。

祈るところでもあり、議論したりおしゃべりもするディン (亭) の前の公共水面です。二重になっていて左手の柵の中は井戸だったところです。右奥に新しい住宅開発が見えます。

コミュニティの会合で、始まりのアナウンスをするチーさんです。マイクがカラオケ・モードになってしまい笑えました。ベトナムでは珍しく多くの方からご発言いただけました。

日曜朝市では、あふれんばかりの野菜、肉 (左に原型をとどめた犬、、、) の他、生きた魚や鳥や屋台 (チェー最高) が並びます。時間帯によって街路の風景は全く変わります。

チーさんご夫妻！
アメリカ帰りのお医者さんでとっても素敵 !!
荒巻さんは同期でサッカー部、大瀧さんは一つ先輩で野球部という都市工学科内の運動会つながりだったメンバーです。

information

10 月の予定

10 月 4 日～ 6 日	鞆 PJ 研究展示
10 月 11 日～ 13 日	佐原 PJ 秋の大祭研究展示
10 月 14 日～ 15 日	大槌 PJ 現地訪問
10 月 15 日	第 7 研究室会議
10 月 20 日	清水 PJ イベント開催

編集後記

原　由希子

ここ最近は夜も涼しく、秋の色も深まってきました。食欲の秋、スポーツの秋、読書の秋…秋にも色々ありますが、皆さんにとって秋はどんな季節でしょうか？私はもっぱら食欲の秋で、最近は朝に梨を一人でまるまる一個かじるのが日課になっております。そんな毎日を過ごしていたらついに先日お腹をこわし、正露丸のお世話になりました。皆さんも食べ過ぎにはくれぐれもご注意ください。